

香乃子が航太に恋しているということはその視線の先を辿ればすぐにわかった。

けれど航太は私の彼氏で、香乃子という女はその程度のことを障害と感じ、ましてや諦める絶好の口実にしてしまう。

私は私で大して航太を好きでもないし、何となく付き合っていただけ。理由なんて一切ない。

だから「飽きたからあげるよ、航太」と、ろくに悩みもせずにへらへらと香乃子に言った。あまつさえ、お私ってば超友達思いじゃん？ 半ば本気でそう思いながら。

それなのに香乃子は私に平手を一発くれて、

「そういうの、よくないよ」

彼女らしからぬ軸を持つ大きな声を出したので、私はまるで理解ができず、正直な話、ただただショックで。

普段は大体の学生が敬遠したがる講義室の最前列、がらがらに空いた特等席に一人きりでちょこんと座り、気まぐれに声を掛けてもおどおどとなしい彼女に手を上げられたことがか、ぼそぼそと地面に物をこぼすように言葉を発するのが常のくせしてこんな落ち着き払った物言いができたのかと予想外の音量に驚いてしまったのか、はたまたせっかくの人の親切心をぐしゃりと造作もなく踏みにじられたからなのか、それはどうにもわからないけどにもかくにも非常にショックで。

「もう香乃子がかたいなー。冗談じゃん、ジョーダン」

呆然となりながらも茶化すようなおのことへらへら笑った。

だって私の周りにこんな子いない。適当につるんでる連中ばかりか。講義と講義の合間を埋める単なる暇つぶしの相手だ、お互いに。会話の自身に意志も主張もありはしない。厚みもなくべらべら。

「神田さんのそういう考え、嫌だな」

それでも何の疑問も浮かばずそうやってたらだと二十一年間を生きてきたのだから、こういう風に真剣な眼差しでもって真つ直ぐに貫かれることは経験がないに等しくて、最後に呟かれた言葉といたら日頃と何ら変わりのない控えめで擦り切れそうな香乃子のか細い声に戻っていたのに何故か金属バットを脳天めがけて容赦なく振り下ろされたかのような衝撃を受け、視界にだって漫画のごとく星がちかちか点滅し、今更になって張られた頬がズキズキと痛んだ。瞬間、びりびり痺れて鼓膜を揺らす割れんばかりの賑やかな喧騒がどこからともなく旋律のように現れる。それはそれはけたたましく。両耳を塞ごうとも消え去らず。

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ！ こんなもの、私は知らない！

腹の深くをこそばゆくざわつかせる甲高い轟きが延々と澄んだまま全身を淀まず隈無く巡るのだ。その上、私の平静を根こそぎ奪い尽くしていったかと思えば、ずつとそこへと居座って鳴り止んでくれぬのだ。見えない何かに肺をぼっかり抉り取られたみたいに苦しくなって、ひっひつと短く息を継ぐ。体中のありとあらゆる液体もさつきからぐらぐらとたぎり続けていずれば蒸気が出そうでしょう。もはや呆気に取られる他はない。

それからいくらか経たない内に私は航太に別れを告げた。別に香乃子に譲ってあげようってわけじゃないけど。

航太はしばらくしつこかった。

香乃子は何も言わなかった。

結局二人は付き合わなかった。

その代わり、大学のゼミが同じというだけで試験前のノートを借りるという存在意義しか持たなかった香乃子が私の中で「すげーヤツ」にカテゴライズされて、目を追うごとに共に過ごすことが増えていき、いつの間にか「神田さん」から「円」になっていた。

私と香乃子の組み合わせはこの世の不可思議でしかないらしく、最初の頃こそ冷やかされることが度々あったが、そんな野次など些事である。外野の声は私の内側にかちりとも響きはしない。私には果てもなく一直線に真面目な香乃子がひとつも馬鹿にできるところなんかないほどにどこまでも新鮮で、昔の自分のろくでもないさをしみじみと痛感して省みてはその都度心底羞恥に駆られるものだから、香乃子はすげー、ほんとにすげー、とアホみたいに何遍も感心するのだ。

そんな香乃子が惚れるぐらいである、もしかしたら航太はとんでもなくいい男だったのかもしれない。もったいないことをした。と、そう思ってしまうのが私の浅ましきであるけれど、香乃子は決してそれを否定しない。「よくない」と誰かを断じたのは、私の知る限り後にも先にも私に平手を放ったあの時のみ。正しいことを知らない私にとつての正しいことは香乃子が言うこともれなくすべてで、香乃子は正しさそのものだった。かくして一人暮らしの香乃子の部屋に私がいる光景も当たり前になりつつあり、バイトがない日は缶チューハイの詰まったコンビニ袋を片手に提げて、夕焼けのオレンジを背に、大抵彼女のアパートの道のりをふらりふらりと歩いている。

玄関のドアを開いた香乃子は連絡も入れず突然日暮れにやって来た私にかけらも迷惑な表情を見せないで、「円。私、お酒弱いつて何度も言ってるじゃない」

私からの手土産を見て困ったように笑う。

いかにも香乃子を選びそうな柔らかい木目のローテーブルには課題用の資料が広げられ、香乃子の整然とした文字でいちいちメモが取られているので、お決まりのように私は「すげー」と思う。むしろ口に出して言っている。

香乃子はそんなことないよと目を伏せてくすぐったそうに笑いながら、ごくごく自然な手つきでテーブルの上を片付ける。これもいつものこと。邪魔なのは私なのにちっとも香乃子は邪険にしない。自身の手を止めることを厭わない。

すげー。香乃子すげー。私だったら無理。絶対無理。優先順位は思案の余地なく自分にしちゃう。だって大事なことって我が身じゃない？ それが第一、他人なんて二の次でしょう？ 後回しにして何が悪いというのか。私は私が損することがこの世の中で一番きらいだ。それでも香乃子はそうではない。自分は二番目、三番目、たとえ最後尾でも気にしない。それを損とも思っていない。これこそ香乃子の香乃子たる所以である。だからすげー。香乃子はすげー。

けれどこれは言葉にしなかった。おそらく香乃子は照れまくる。あのくすぐったそうな笑顔で。その時一緒に目尻が下がるのも癖。それが誉められることに慣れていない香乃子なりの「嬉しい」という感情表現だ。ことに最近ようやく気付いた。この他人の心に疎い私がだ。自己中だと誰に言われるまでもなく自認しているこの私である。それってかなりすごいと思う。そしてその一因は香乃子にあるのだから、ほら見ろ、